

# テープ・レコーダーの文化史

## — 冷戦初期における録音空間の誕生 —

三 添 篤 郎

### 序 章

テープ・レコーダーは冷戦時代の合衆国文化にいくたびも登場する。1960年代ビート世代のウィリアム・バロウズはテープ・レコーダーを使用し小説技法に取り入れたし、前衛音楽家グレン・グールドは生演奏からテープ録音に移行した。テープ・レコーダーの誕生は冷戦期の幅広い芸術領域において音の生産・消費形態に変動を起こす一方で、70年代にニクソン大統領を転覆させる契機となる盗聴事件つまりウォーター・ゲイト事件へも接続され、政治の表舞台にも登場した。またステュアート・ホールやレイ・チョウらが論じたように80年代から90年代にかけて利用されたソニーのウォークマンはグローバル資本主義、日本論、言説・表象、社会的規制運動などのネットワークで多様な意味づけをされながら、実践の場においては公共空間と私有空間の境界線を不断に問う音響テクノロジーとなっていく。<sup>1</sup>

こうした1960年代以降の冷戦合衆国文化史を物語ることによって、しばしば見過ごされてきたのは、テープ・レコーダーが合衆国で実用化されたのが第二次大戦直後、つまり冷戦初期にあたるという点だ。冷戦初期の合衆国文化史を読み替えようとする文化批評家 W・T・ラモンは、テープ・レコーダーや35mmカメラ、テレビジョン、ハイ・フィデリティといった1950年代に起きた「消費電化革命」が文化生産の形態を大資本による占有から脱中心化させる契機となったと指摘する。中でもテープ・レコーダーはヴァナキュラーな音楽の記録に貢献し、エルヴィス・プレスリーやチャック・ベリー、リトル・リチャードなどの南部「ポピュラー音楽」を「ロックンロール」として合衆国全土に広めることになり、「制度的な場にあり局所化していた文化生産の場を破壊することになった」(Lhamon 12)。実際、エルヴィス・プレスリーが主演する50年代映画『監獄ロック』(1957)は、刑務所上がりの無名の青年がテープ・レコーダーを用いたことでロック歌手として成功していく物語であった。

ただしテープ・レコーダーはたんに音楽産業に画期的な転回点を与えただけでな

く、冷戦初期に増加した郊外という空間を構成する中産階級の文化資本にもなっていた。エレイン・タイラー・メイの冷戦文化研究は文化資本としてテープ・レコーダーを考える上で、一定の有益な枠組みを与えてくれる。封じ込め論理によって規定されていた冷戦期合衆国では、第二次大戦中に曖昧になった人種やジェンダーの規範がマッカーシズムに代表される反共主義政策によって再編成された。体制にとって異質なものを排除するために、郊外を中心とした家庭空間が白人中産階級異性愛者の砦となった。家庭空間と資本主義経済に基づく「消費電化革命」（掃除機、冷蔵庫、テレビジョンなど）の大量生産・大量消費こそが民主的な「アメリカ」の姿であるという認識は、1959年にモスクワで開催された「アメリカ博覧会」における展示で頂点を極める（May 10-4）。冷戦初期の合衆国は消費電化とその空間配置によって形作られていた。

この冷戦文化の空間性を考慮した時、ラモンが音楽史の観点から「何が」録音されていたかに着目したことと同時に、文化資本としてのテープ・レコーダーが「どこで」利用されたのかといった録音空間をめぐる問いも、冷戦とテープ・レコーダーのつながりを論じるうえで重要であることは明らかだ。本稿はテープ・レコーダーを冷戦の枠組みから歴史的に考察するために、録音と空間が冷戦初期に結びついていくプロセスを、当時の技術書、メディア表象、大衆文化をたどることで多角的に解明する試みである。テープ・レコーダーが置かれる空間には、冷戦イデオロギーが抗争する。

## セミ・ジョゼフ・ビガンの録音史

テープ・レコーダーが合衆国で実用化されるまでの歴史は、多くの戦後メディア技術がそうであるように、ナチスの軍事技術を転用していく物語である。よく知られるようにテレビジョンや「ハイファイ」技術の市場への流出は、戦中にナチスが戦場で利用していた軍事技術を連合軍が接収した結果である。テープ・レコーダーもまた同様である。テープ・レコーダーが50年代に受容されていく過程を考えると意識しなければならないのは、ナチス・ドイツから合衆国へどのようにテープ・レコーダー技術が流れていったのかという点だ。テープ・レコーダーがどのような系譜をたどって合衆国に到達したのかを理解することは、テープ・レコーダー史を俯瞰することのみならず、戦後のテープ・レコーダー実用化に伴う「家庭録音」という修辞が国家を巻き込んで生成されていく過程を認識する作業でもある。そこで注目するのはドイツと合衆国の両国でテープ・レコーダーの開発に携わり、1949年に合衆国で『磁気録音』を刊行した越境技術者セミ・ジョゼフ・ビガン（Semi Joseph

Begun、1905-1995) である。

戦後合衆国にテープ・レコーダーが実用化されるまでの歴史は世紀転換期のヨーロッパにさかのぼることができる。1898年にデンマークの技師ヴェルデマル・ポウルセンが磁気録音技術を発明し「テレグラフォン」と命名したことをもって、テープ・レコーダーの原型が誕生した[図1]。1900年にはパリ万博で「テレグラフォン」がグランプリを受賞し、1920年代にはドイツでフリッツ・フロイマーがさらに改良を進め「マグネトフォン」が誕生[図2]、1934年にはドイツ・ラジオ博覧会で宣伝された。ナチス・ドイツが独占的に占有していたマグネトフォンの録音技術は拡声器とともに軍事技術としてヒトラーのプロパガンダ政策に利用された。

ナチスから合衆国へテープ・レコーダー技術がどのように移動したのかについて、音響技術史でしばしば挿入される逸話がある。ドイツ軍のラジオを監視していた連合軍のスパイは、あるとき「彼らの聞いているプログラムの多くが生放送ではない」(Gellatt 286)と気づいたという劇的瞬間である。円盤に特有のスクラッチ・ノイズがないことでラジオを「生放送」だと信じ込んできた連合軍諜報員の疑問は、「1944年9月11日、連合軍が四年間ドイツの支配下にあったラジオ・ルクセンブルクを抑え、その放送局の装置のなかに並はずれて高性能の新しいマグネトフォン[テープ・レコーダー]を発見した時に解けた」(286-7)とされる。ドイツの録音技術が1944年9月11日に連合軍によって突然「発見」されたという物語は、録音技術史においてある種の神話性を帯びて語られている。<sup>3</sup>

セミ・ジョゼフ・ビガンの経歴は、「1944年9月11日」神話にある程度の修正を迫る。彼の人生は戦前ドイツと戦中・戦後合衆国の両者をもたいでいるからだ。以下、技術史家マーク・クラークが編纂したビガンの初評伝を頼りに、これまでほぼ論じられてこなかった彼の人生をナチスと合衆国の断絶ではなく連続性の観点から捉えてみる。1905年、ダンチヒ(現グダニスク、ポーランド)でユダヤ系の血筋をもって生まれたビガンは、ベルリンの工科大学を卒業した後に、ポウルセンのテレグラフォンを商用化するために設立されたフェルディナント・シュハルト株式会社(Ferdinand Schuchard AG)に引き抜かれた。1928年にはすでにドイツで磁気録音開発の先陣を切る中心人物となっていた。技術開発で有名なローレンツ社(Lorenz)に再就職した彼は、その後いくつかのラジオ局で口述筆記用として使用されることとなるローレンツ・レコーダーの開発に成功する。

ユダヤ人であった彼は1935年にナチス政権のあおりを受ける。自らの同胞が戦々恐々とするなか、高度な録音技術開発能力をもっていたビガンはドイツのラジオ放送局からヘッドハンティングされ、政治放送用に磁気録音機技術を提供するようになる。彼は技術者としてナチスに買われる一方で、いつ迫害されるかわからない情

況に立たされ、アメリカへの亡命を選択した。この時の様子を、彼は戦後合衆国で刊行された『磁気録音』に「テキストフォンは1933年に市場に出た。これはヒトラーが権力を握ったところである。ナチスは手に入るあらゆる録音装置を必要としていた。ゲシュタポは大量のテキストフォンをドイツ政府のために購入した」(9)と小さく記述する。

合衆国亡命後のビガンは、合衆国政府組織下で大規模な軍事技術開発に取り組む。1938年にはレコードのピックアップ開発で名を馳せていた米国ブラッシュ・ディヴェロップメント社に入社した。<sup>4</sup> ブラッシュ社は第二次世界大戦中にマンハッタン計画の中核を担うことになる政府部局 NDRC (米国国防調査委員会) 及び OSRD (科学研究開発局) に軍事協力をし、新技術を開発・提供する。<sup>5</sup> 40年代初頭から半ばにかけての磁気録音技術の発達を振り返って、ビガンは『磁気録音』の中で「あの戦争が勃発すること」が必要であったとビガンは2度にわたって証言している (10-1)。軍事技術開発を通じて彼は利便性の観点からワイヤー録音よりもテープ録音の開発を重視するようになり (Daniel 73)、第二次世界大戦の終了とともに、1947年にブラッシュ社から「BK-401 サウンドミラー」を発売した [図3]。つまり通例1944年をターニング・ポイントとするテープ・レコーダーの神話的挿話は、「発見」を実用化にまで進めることのできる一人の技術者があらかじめドイツから亡命していたからこそ、滞りなく成立しえた物語であった。

戦中 OSRD に協力したビガンは、戦後合衆国におけるテープ・レコーダー開発の先陣を担った。1949年に刊行された『磁気録音』の「序文」には、執筆に協賛した会社の一覧が挙がっている。アーマー・リサーチ社 (The Armour Research Foundation)、コロニアル・ラジオ社 (Colonial Radio Corporation)、ベル電話会社、マグネコード株式会社、ピアース・ワイヤー・レコーダー会社 (Peirce Wire Recorder Corporation)、ワイヤーコーダー社 (WiRecorder Corporation)、そしてオーリコン・マシンツール社 (Oerlikon Machine-Tool Works) と戦後初期の音響機器会社の名前が連なる。多くの同業者までが参加している『磁気録音』は、戦後初期におけるテープ・レコーダーの技術的知の総決算であった。

知の総決算を謳う『磁気録音』が扱う射程は広い。9章で成り立つ『磁気録音』は、順に「磁気録音史」「磁気録音における音響的要素」「磁気学の原理」「磁気録音のセオリー」「磁気録音システムの構成要素」「磁気録音装置」「磁気録音の応用」「使用と磁気録音測定」「蓄音機への対抗としての磁気録音」という多面的な章立てを取る。さらに膨大な「用語集」や「索引」を完備し、当時まだ新しいテクノロジーであったテープ・レコーダーの写真を大量に織り込む、視覚的にも見やすい「専門書」である。

この見やすさは、『磁気録音』というテキストが機械工学専門書と一般啓蒙書の架け橋になっていたことも示す。テキストの二重性はすでに「序文」に表明されている。「磁気録音はいま青年期にある」とテクノロジーを成長にたとえる冒頭において、こうした発達中の技術を楽しむ読者像をピガンは想像してみる。「エンジニアと技術的なことに関心のあるアマチュアは今日のテープ・レコーダーの全体像がわかる情報を欲しがっているだろう」(V.)と。続けて、想定される読者層はさらに拡大される。「読者は気づくと思うが、[テープ・レコーダー]に関する情報が知りたければ全ての章を読むことはない。注目すべきことは本書が歴史、音響的な要素、装置、アプリケーション、磁気蓄音機といった、技術的背景を必要としない内容も扱っていることである」(V.)。冒頭で設定した「エンジニア／アマチュア・プロ」という読者以外にも「技術的素養を必要としない」一般読者であっても十分に読むにたえると明言する。数年前までテープ・レコーダー開発が国家的プロジェクトの一つであったとは信じがたい語り口である。ピガンの話法はテープ・レコーダーの利用者を徐々に移行させるものである。

軍事技術であった磁気録音が、戦後どのように一般的に利用されることになるのか。1949年のピガンは多くの用途を提起してみせる。

戦後の磁気録音史はまだ書かれていないし、当然、今書かれている。市民ラジオと蓄音機生産が軌道に乗ってきたことで、多くの会社が磁気録音分野に参入する重要性を感じている。家庭録音 (home recording)用の多くの装置が現在製造されている。市民の反応を評価するにはまだ時期が早い。(12：下線筆者)

さらに、第9章「蓄音機への対抗としての磁気録音」で、磁気録音技術が大量生産される可能性にふれながら、テープ音楽がレコード音楽をいつの日か追い抜くこと、個々人が「家庭録音」をできる時代がやってくること、ワイヤー録音からテープ式録音へと録音方法が変化することを予見する。彼の言葉通り、1952年にテープ録音はワイヤー録音と円盤録音を駆逐した(Morton 138)。そして『磁気録音』刊行前後の合衆国ではテープ・レコーダーが次々と実用化された。アンベックス社、マグネ・コーダ社、フェアチャイルド、プレスト、RCA、コンサートーンなどの各社もほぼ同時期に製品化に成功した。<sup>6</sup> 1953年までにテープ・レコーダーは100万台を販売した(Millard 211)。数年足らずでナチスの軍事技術は、合衆国における実用化へ漕ぎつきる。

セミ・ジョゼフ・ピガンの録音史は、そのまま冷戦初期合衆国でテープ・レコーダーが導入されていく歴史でもあった。彼のテキストは、戦中から冷戦初期にいた

る過程で、政府から民間企業へ、民間企業から国民へとテープ・レコーダー技術が移行する境界線をつなぐパイプラインとなっていた。さらに指摘しておかなければいけないのは、彼の貢献がテープ技術を実用化したことでも、後続の企業に膨大なテープ・レコーダー技術を提供したことだけでも限らない点だ。戦中の軍事技術開発の中枢にいたビガンが、戦後におけるテープ・レコーダーの用途を示す過程で、「家庭録音」という語を選択した無意識的操作は、50年代文化においてテープ・レコーダーが配置される空間を40年代後半からすでに方向づけていたのだ。

## 家庭録音の時代

冷戦初期のテープ・レコーダー言説には「家庭録音」という修辭が頻出する。S・J・ビガンも50年代の録音場所が家庭中心となるだろうと予測した。1954年5月29日『サタデー・レビュー』誌の記事「テープ・レコーダーを紹介する」でも、「第二次世界大戦以前、家庭録音機械はせいぜい技術職人の喜ぶものであった」(Jordan 36)と述べ、第二次世界大戦後の「家庭録音」実用化を賞賛した。50年代テープ言説は「家庭録音」という語を共有し合うことで成立していた。しかし冷静に考えれば、本来無関係である「家庭」と「録音」という二つの語が結びつく必然性はどこにもない。なぜ冷戦初期の録音文化産業は「家庭」を前景化しえたのだろうか。

確認までに言い添えておくと、テープ・レコーダーが誕生するまで録音技術は一部の専門家に独占されており、一般市民が日常的に行うことは稀であった。19世紀末に発明された蓄音機は、そのほとんどが再生のために使用されていた。1927年に登場したジューク・ボックス(コイン・イン・ザ・スロット)は、30年代を通じて生産され続け、39年には22万5千台、42年に40万台が合衆国内にあった。ジューク・ボックスの音楽を聴いて楽しむことが一般大衆のあいだの複製技術を使った娯楽形態のひとつであった。蓄音機からテープ・レコーダーへの移行とは、録音が誰でも容易にできるようになったという決定的な転換であるという認識に間違いはない。問題となるのは、テープ録音の修辭に「家庭」という空間を示す語が着かなければいけない政治社会的な理由である。そこでテープ・レコーダー産業と消費者の接点が模索される広告メディアを手がかりとして、「家庭」と「録音」が連動していく過程を分析する必要が出てくる。

「家庭」とテープ・レコーダーの共鳴は、『磁気録音』が刊行される2年前、1947年『サタデー・イヴニング・ポスト』に掲載された「サウンドミラー」の広告からすでに見ることができる[図4]。友人を招いた誕生日パーティーを、部屋の中で行っている場面がそこには描かれている。女兒がケーキのロウソクを吹き消す音声

を、母親が笑顔でテープ・レコーダーに録音している。「笑い声を永遠に覚えておこう。「磁気リボン」に録音しておこう」と広告は訴える。この広告が50年代以降のテープ・レコーダー広告と大きく異なる点は、録音をする主体が女性であることだ。さらに、この家庭には父親の姿が映し出されていない。それは終戦直後、「父の不在」のコードが幅広い広告分野において無意識的に共有されていたことと同じである。「家庭」は存在しても、「家族」は存在していない。しかし少なくともテープ・レコーダーはすでに家庭空間に配置される技術として表象されている。

このイメージは、『磁気録音』が刊行されたのと同様1949年に発表されたアーサー・ミラーの戯曲『セールスマンの死』(1949)で変容する。戯曲内ではワイヤー・レコーダーが「家庭」の絆を深める道具として登場している。時期的にワイヤー・レコーダーとテープ・レコーダーが並存していたのでこの両者の差を議論することは特にするつもりはない。むしろ目を向けなければいけないことは、家族を楽しませようと父＝男性が、「家庭」で家族の声を録音する主体として描かれ始めていることだ。「家庭」の中に突如として侵入してくる録音機に対して、妻や子供はどんな言葉を録音したらいいのか困惑する。録音技術を媒介につながる「家庭」は存続できるかどうかギリギリのところを行き来する。『セールスマンの死』では、録音空間と家庭空間が同義となり、その空間には家族構成員が勢ぞろいするべきだという合意形成が誕生している。

核家族の群像は50年代に突入するとさらに強固になる。1952年の『タイム』誌に掲載されたウェブスター・エレクトリック社のテープ・レコーダー広告には、当時の代表的なテープ・レコーダーの名前をあげながら、「単純にすごい—すごい単純！ クリスマスはエコテープ・レコーダーで、家族全員がわくわくします」というコピーが記された [図5]。クリスマスを1ヶ月後にひかえたこの広告には、4人の白人中産階級の家族が描かれている。スーツを着た父親が、テープ・レコーダーをクリスマスのために購入して来たので、家族（母親・娘・息子）が満面の笑みで喜んでいる。

今年、クリスマスが365日続きます！あなたのリストに「家族全員」のためのギフトを加えてください—ウェブスター・エレクトリック・エコテープ・レコーダーを。これがあれば、親密な友好関係を保存して蘇らせることができます…ホーム・ムービーにハイ・フィデリティのサウンドを追加できます…学校や音楽のレッスンで子どもに役立ちますし興味を与えることができます…永遠にお気に入りのラジオ番組の美しい音楽を保存できます！多くの点で、エコテープがあなたのご家族を結び付けます、一年中です。(強調・省略原文に

よる)

録音した音声永久に保存できるように、家族4人の絆も一年中続くものであるという安易な類推が、テープ・レコーダーの存在によって難なく語られる。テープ・レコーダーを持つことは理想的な家族に近づける物質的な文化資本のひとつとなる。この過程において「家庭」と「録音」と「テープ・レコーダー」は疑いもなく一つの広告図像のなかで結びつく。

テープ・レコーダーは家庭で利用する技術であるという暗黙の了解は、大手雑誌メディアに限られたことではない。1955年4月、音楽専門雑誌『ハイ・フィデリティ』は、家族がテープ・レコーダーを囲んで団欒している写真広告を掲載している〔図6〕。新製品オーディオの性能を説明することを中心としたこの雑誌のなかで、テープ・レコーダーはたんなる音響技術として紹介されるのではなく、家庭のなかで楽しまれる娯楽用品として位置づけられる。この雑誌の読者層はあくまで、すでに家族を持っているか、あるいは家庭空間を待望している男性である。「子どもの素晴らしい瞬間を忠実に録音することから、プロのミュージシャンやエンターテイメントのスターを正確に録音する必要性にいたるまで」という用途の説明や、写真に写ったテープ・レコーダーを操っているのが男性であることから、あくまでテープ・レコーダーの利用者（少なくとも読者）が男性中心であったことを物語っている。

47年において「父の不在」を描いたテープ・レコーダー広告は、50年代半ばまでに家族全員（父母＋子ども2人の核家族）を取り込むようになった。1956年の『ホリデー』誌に掲載されたテープ・レコーダー広告もまた、家族の絆を深める道具としてテープ・レコーダーを宣伝する。「ありがとう、お父さん。私たちはずっとベントロン・テープ・レコーダーが欲しかったのよ」というコピーの傍らに、4人家族が立っている。図像から判断すれば、テープ・レコーダーの購入者は明らかに父親であり、セリフを発しているのは2人の娘であり、父親に抱きついているのは思春期の姉である。

しかし、どこかこれまでの系譜からは違和感を覚える広告である。理由はこの広告が50年代前半の広告とある部分においては踏襲し、ある部分では踏襲していない点があるからだ。家族4人が勢ぞろいしているにもかかわらず、録音場所が「家庭」の中かどうかははっきりとしない。父親がテープ・レコーダーを購入したから喜んでいるのか、それとも買ってあげると約束しただけなのかも判断できない。さらに購入したとしても誰が使用するのかもはっきりしない。テープ・レコーダーは誰のための技術なのかが曖昧化されている。家族の絆はテープ・レコーダーによって深まるかもしれないが、録音行為者が誰になるかを特定する必要もなければ、録



音空間が家庭の中だけで使用される必要もないのではないかという揺らぎが1956年には発生している。おおよそ察せられるとおり、この広告には一言も「家庭録音」という修辞が登場しない。

50年代後半のテープ・レコーダー広告は家庭以外の利用空間も前景化ようになる。1959年の『タイム』に4ヶ月連続で掲載されたウェブコールの広告は、各月とも利用者・利用場所が異なる。9月は母親が2人の子どもの成長記録をつける3人の構図である。10月は男性4人がジャズを演奏している姿を捉えて、「ジャズ・セッション、コンサート、劇、パーティー」で使用できることを伝えている[図7]。11月は若い男女が会話する姿を映し出している。12月は大人数のパーティーで大活躍することが伝えられている。録音は50年代後半になると、もはや家庭空間に縛り付けられなくなり核家族の図像が広告から消え去る。

生産者側が作りだした1950年代前半のテープ・レコーダー広告・言説は、冷戦初期の家庭賛美と重なり合ってきた。家族の絆をつなぐ装置としてのテープ・レコーダーのイメージは、様々な雑誌メディアに流通しながら、冷戦イデオロギーを補完する。消費者はテープ・レコーダーを使用することで中産階級のイメージを手に入れる。一見すると、広告と消費者と家庭録音の三点は循環しあいながら冷戦文化を生成しつづけているようだ。ところが50年代後半には「家庭録音」は広告から消えていく。それでは、「家庭録音」という語の後半「録音」の持つ磁力がいかに冷戦期合衆国文化の中で「家庭」を離れた空間で表象されていたかを見ていくことにしよう。

## 増殖する録音空間

「家庭録音」を訴え続ける広告言説が幅広く流通していたとき、消費者はテープ・レコーダーを家庭以外の空間で利用していく道も切り開いていく。家庭でテープ・レコーダーを利用させようとする制度的な言説は、50年代後半の広告言説の中で失効しはじめる以前から、すでに50年代大衆文化の中で失効していた。小型化された録音テクノロジーの利用空間を家庭にのみ回収しようとする言説は、録音機を持つ携帯性が意識化されたとき「家庭」という磁場を離れる可能性を常に孕み続けていた。本節では50年代映画に登場するテープ・レコーダーがどのような空間で描かれているのかという、これまで語られてこなかった文化の系譜を意識化するのが目的である。

もちろん、テープ・レコーダーの家庭外利用が大衆文化のみの特権的な行為だったわけではない。技術史家デイヴィッド・モートンは『オフ・ザ・レコード—アメ

リカにおける音声録音の技術と文化』で、テープ・レコーダーが50年代に家庭以外の公共空間でどのように消費されていたかの実例を記述している。朝鮮戦争の際にはテープ・レコーダーを用いたヴォイス・レターが大活躍し、朝鮮にいる米軍兵士と祖国アメリカをつなぐ役割を果たしていた。民族学のフィールドワークや、オーラル・ヒストリーの編纂にテープ・レコーダーが積極的に利用されることもあった。録音されたテープを裁判所に証拠品として提出できるようにもなった。加えて、博物館展示にテープ録音された「自然の音」が追加されるようになったとも指摘している。教会では牧師が説教をテープ・レコーダーに録音して布教目的に配布する、いわゆるテープ牧師 (tape ministry) の原型が出来上がり、テレヴァンジェリストへの道を開いていった (Morton 136-70)。テープ・レコーダーは携帯性によって様々な録音空間を開拓していった。

「家庭」から離脱した「録音」の風景は戦後大衆文化のモチーフになる。しかし戦後を待たずして、録音テクノロジーは1944年に製作されたビリー・ワイルダー監督の映画『深夜の告白』にすでに見られ始める。この映画は保険会社の男性が人妻の夫に保険をかけて殺害してしまったことをヴォイス・レコーダーに告白する形で進行するフラッシュ・バックを多用した映画である。男性主人公はオフィスで、マイクを片手に過去の殺人の罪状をマイクに録音する。職場では仕事や会議のメモとして利用することが宣伝されていたヴォイス・レコーダーは、この映画の中ではまったく別の用途で用いられる。録音装置は「家庭」が崩壊していくプロセスが吹き込む技術として前景化されている。

戦後、録音装置は家庭空間を越えて行く。マリリン・モンローとジェーン・ラッセルの二人が主演をつとめた1953年公開のミュージカル映画『紳士は金髪がお好き』では船の中にテープ・レコーダーが持ち込まれる。ヨーロッパに向かう客船の中で、モンロー演じるローレイの素行を監視する役目として、ローレイの婚約者に雇われた男性私立探偵は、テープ・レコーダーを船内に仕掛けてマイクで彼女らの会話を録音することになる。盗聴テープは、妻を持ちながらローレイと密会する老資産家の「家庭」を崩壊させる危険性を少なからず孕む。

ロバート・アルドリッチ監督『キスで殺せ』(1955)には、独身ハードボイルドの探偵マイク・ハマーが使用する留守番電話テープ録音が描かれている。<sup>7</sup> マイク・ハマーは、在宅していながら鳴り響く電話に出ずに、まず留守番電話に接続させ応答メッセージを流し、電話をかけてきた相手が誰か確かめる。このことはテープ・レコーダーから不在を知らせるアナウンスが流れてくることが留守の証拠であるという暗黙の前提が共有される社会でないと成立しない。録音装置を媒介にして、家にはいるはずの家主が在宅か留守かを恣意的に選択できる状況が発生する。

脱家庭テクノロジーとしてのテープ・レコーダーは、やがてオーソン・ウェルズの映画『黒い嵐』(1958)に継承される。このノワールな物語はアメリカとメキシコの国境付近で発生した爆弾テロ事件をきっかけにして始まる。アメリカ側の刑事クインランが強引な捜査を行っていることに疑問を抱いたメキシコの麻薬捜査官バーガスが、腐敗した捜査方法の実態を暴くために操作に乗り出すことがプロットを中心となる。クインランの友人は買収され、おとり捜査官となり、隠しマイクをつけてクインランと対面することになる。緊迫感に包まれた最終場面で、クインランの語る声は、おとり捜査官のマイクを伝わり遠くから見つめるバーガスの電波受信機に送信され、それがテープ・レコーダーに逐一録音される。映画自体も、テープ・レコーダーから再生されるバーガスの罪の告白の声とともに、テープ・レコーダーのクローズアップで幕切れを迎える。テープ・レコーダーは「屋外」で使用され、大事件の解決を促す。録音装置は「家庭」という磁場を離れて、悠々と国境線付近で可動する。

家庭とは別の空間でテープ・レコーダーが使用される系譜を意識すれば、元祖ロック映画と呼ばれる『暴力教室』(1954)で、学校にテープ・レコーダーを持参する高校教師リチャード・ダディエの姿が描かれていたことにも気づくはずだ。彼は英語の授業用にテープ・レコーダーを持参する。乱暴狼藉を働く生徒一人ひとりに声を録音させ、その後には発音の間違いを直すよう訓練させるために、テープ・レコーダーが用いられる。ダディエがテープ・レコーダーを自分のロッカーにしまう場面は、この技術が「家庭」ではなく「携帯性」に力点を置いた技術として捉えられていたことをも物語る。

次の録音空間は刑務所だ。エリア・カザンの『群集のなかの一つの顔』(1957)では女性記者が留置所にテープ・レコーダーを持ち込む場面から始まる。「群集の中の一つの顔」というラジオ放送の製作のために留置所を訪れた女性記者マーシャは、ロンサム・ロードという名の歌の達者な若者に出会い、彼の歌声を録音する。その彼を一躍スターに仕立て上げる展開が物語の中心となる。テープ・レコーダーは「家庭」という磁場を離れた所で次々と無名の「声」を発見し人生を転換させるテクノロジーとなる。序章で触れた『監獄ロック』のテープ・レコーダー表象は、「無名の声」をスターダムに押し上げる50年代文化の一つの枠組みのあらわれである。

テープ・レコーダーを手に都市空間や辺境の地を移動する図像は『ハイ・フィデリティ』や『サタデー・レビュー』といった主流雑誌の広告や記事にも50年代半ばには登場し始めていく。50年代初頭には明らかに分極化していた広告表象と映画表象の差異は、次第に不分明になり、テープ・レコーダー言説からは「家庭」が脱落し、「録音」が屹立する。冷戦初期にテープ・レコーダー文化が生成されていくプロセ

スとは、「家庭」と「録音」が結び付けられ、分離されていくプロセスに並行する。

このように自立した「録音」は、しかし冷戦封じ込めイデオロギーを転覆するような対抗文化のみに接続されたわけではない。たしかに60年代以降、対抗文化集団メリー・ブランクスターズが、改造したバスに乗り込んで「家庭」から離脱したサウンドスケープを求めていく際、彼らが活用したテクノロジーのひとつはテープ・レコーダーであった。若者文化あるいは対抗文化に流出したテープ・レコーダーは制度が聞き取ろうとしない声や音を録音するために奪用された。しかし同時に、テープ・レコーダーは声を管理し監視するテクノロジーとして冷戦時代の諜報文化を構築する。テープ・レコーダーは冷戦期スパイ小説・映画におけるサブカルチュラルなガジェットとなっていく。つまり、どのような空間においても大衆の声が録音できるという文化論理は、どのような空間においても全ての声を録音し保存することが可能であるとする高度管理社会の論理へと容易に反転されていく可能性と表裏一体である。テープ・レコーダー文化とはこの反転の構造が、体制側と反体制側、生産と消費の双方で形を変えながら繰り返され、冷戦空間を多元的に形成していく歴史の過程である。

## 参考文献

- Begun, Semi Joseph. *Magnetic Recording*. New York: Rinehart Books, 1949.
- . *Magnetic Recording: The Ups and Downs of a Pioneer*. Ed. Mark Clark. New York: Audio Engineering Society, Inc., 2000.
- Brush Development Company. "Soundmirror." Ad. *Saturday Evening Post*. 1947.  
<<http://reel2reeltexas.com/vinAd47.html>>
- Chanan, Michael. *Repeated Takes: A Short History of Recording and its Effects on Music*. New York: Verso, 1995.
- Daniel, Eric D, and C. Denis Mee, and Mark H. Clark. *Magnetic Recording: The First 100 Years*. New York: IEEE P, 1999.
- Gellatt, Roland. *The Fabulous Phonograph: 1877-1977*. New York: Macmillan, 1980.
- Jordan, Robert Oakes. "Introducing Tape Recorder" *Saturday Review*. May 29, 1954. 36-7.
- Lhamon, Jr., W. T. *Deliberate Speed: The Origin of a Cultural Style in the American 1950's*. 1990. With a New Preface. Cambridge: Harvard UP, 2002.
- Magnecord, Inc. "My New Magnecorder in an entertainment thrill!" Ad. *High Fidelity*. Apr, 1955. 28.
- May, Elaine Tyler. *Homeward Bound: American Families in the Cold War Era*. New York: Basic Books, 1988.
- Millard, Andre. *America on Record: A History of Recorded Sound*. Cambridge: Cambridge UP, 1995.
- Miller, Arthur. *Death of a Salesman*. New York: Viking P, 1949.
- Morton, David. *Off the Record: The Technology and Culture of Sound Recording in America*. New Jersey: Rutgers UP, 2000.

Penron. "Thanks a lot, DAD." Ad. *Holiday*. 1956.

<<http://scriptorium.lib.duke.edu/dynaweb/adaccess/radio/1950-1956/>>.

Webcor. "Make your own stereo tapes." Ad. *Time*. 12 Oct, 1959. 115.

Webster Electric. "Simply wonderful--wonderfully simple!" Ad. *Time*. 24 Nov, 1952. 97.

ポール・ドゥ・ゲイ他『実践カルチュラル・スタディーズ——ソニー・ウォークマンの戦略』暮沢剛巳訳，大修館，2000.

## フィルムグラフィ

*A Face in the Crowd*. Dir. Elia Kazan. Warner Bros, 1957. (『群集のなかのひとつの顔』)

*Double Indemnity*. Dir. Billy Wilder. Paramount, 1944. (『深夜の告白』)

*Gentlemen Prefer Blondes*. Dir. Howard Hawks. 20th Century Fox, 1953. (『紳士は金髪がお好き』)

*Jailhouse Rock*. Dir. Richard Thorpe. Warner Bros, 1957. (『監獄ロック』)

*Kiss Me Deadly*. Dir. Robert Aldrich. United Artists, 1955. (『キッスで殺せ』)

*Touch of Evil*. Dir. Orson Wells. Universal, 1958. (『黒い畏』)

## 【注】

- 1 スチュアート・ホールらによるウォークマンの文化研究についてはポール・ドゥ・ゲイ『実践カルチュラル・スタディーズ』の幅広い議論を参照。
- 2 テープ・レコーダーを含めた音響複製技術の歴史は Gellatt, Millard, Chanan を参照。マグネトフォンの歴史については、Daniel (47-71) が詳しい。
- 3 しかし、マグネトフォンは 1937 年に一度だけドイツ AEG が米国 General Electric Company (GE) でデモンストレーションをしている。その際、GE はテープ・レコーダーの将来性を誤算して導入を取りやめた (Daniel, 60)。
- 4 この経緯については Daniel, 31-3。これまで体系的にまとめられてこなかったセミ・ジョゼフ・ビガンの資料は現在、米国スミソニアン協会 (Smithsonian Institution) の書庫に眠っている。協会のホームページによれば、往復書簡、メモ、特許書類、講演録等が収められている。
- 5 NDRC (1940 年 6 月設立) とビガンのつながりについては、Begun (2000: 64-8) を参照。また対戦中に戦時情報局 (OWI) はワイヤー録音機を軍に持たせて戦場の様子を現場で記録録音させたり、軍事キャンプにラジオ局を建造させたりするなど、音響テクノロジーを積極的に利用した (Morton 59-62)。第二次世界大戦後、男性たちのあいだで「ハイファイ」音響テクノロジーのブームが発生した文化史の流れを考慮に入れたとき、戦場での音響テクノロジー体験が戦後のマスキュリティをいかに再構築する契機となっていたかについては稿を改めて論じる予定である。
- 6 Daniel, 83-4。磁気テープによる録音が初めてレコード化されたのは、アンペックス社製の Model200 を利用したビング・クロスビーのラジオ番組の録音であると言われている (Millard 200-1)。
- 7 合衆国における留守番電話の歴史については、David Morton 著 *Off the Record* の第 4 章 "Message on the Answering Machine" を参照。

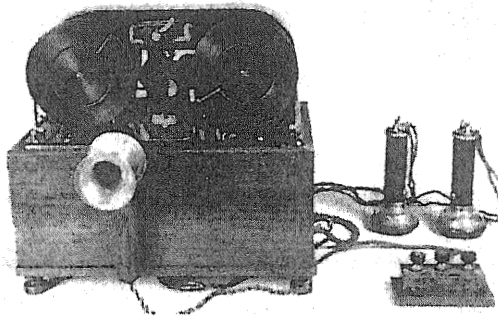


図1 テレグラフォン (Daniel 24)

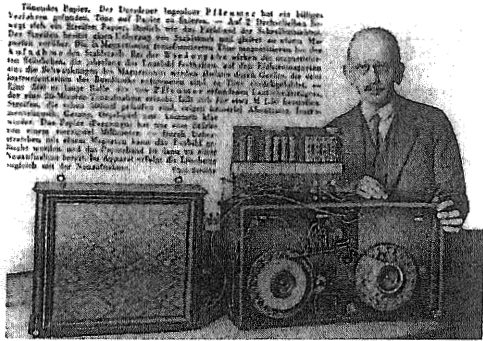


図2 フリッツ・プフロイマーとマグネトフォン (Daniel 48)

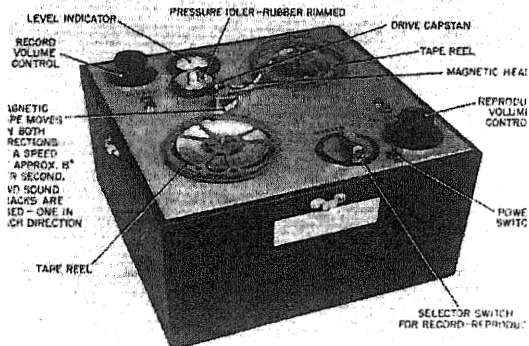


図3 BK401 型テープ・レコーダー (Begun 167)

Remember their laughter forever... record it on Magnetics Ribbon

Brush Development Company, 1947.



**SOUNDMIRROR**  
Magnetics Ribbon Recorder

4 Brush Development Company, 1947.

My new  
**Magnecorder**  
is an entertainment thrill!

says Johnny Desmond.

From the beautiful recording of whistling between continents to the exciting recording made of the presidential election and celebration war, Magnecorder holds the reputation for being in the recording Johnny Desmond, popular star of TV, radio and recordings. His wife Ruth, and little Jimmy and Jane, listen to one of the most recorded high-fidelity tapes, reproduced with perfect clarity on his new Magnecorder Model H. If you're seeking the finest in tone, high fidelity recording and reproduction, you can't do better than a Magnecorder.

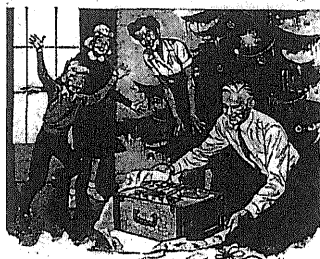
Call on your Mastercard dealer today. He's listed under "Electronics" in your standard telephone directory. Endorse who Magnecorder is considered the finest.

**Magnecorder, Inc.**  
The finest moves in tape recording

1104 NORTH HAZARD AVENUE • CHICAGO 34, ILLINOIS • 1947



6 Magnecorder, 1955.



Simply wonderful—wonderfully simple!  
our whole family will be thrilled  
with an Ekotape Recorder for Christmas

16 years, spread Christmas over 365 days! Head your list with the perfect family gift—the Webster Electric Ekotape Recorder. With it, you'll preserve and revive intimate photographs—add high-fidelity sound to your movie movies... make school and work lessons more helpful, more interesting to the children... capture permanently the beautiful music of your favorite radio programs! In many ways, you'll feel that Ekotape brings a happy year's family closer together, year 'round.

Ekotape is the finest-built, most dependable portable recording-reproduction you can buy for the home—as well as for churches, schools, business and industry. Its four control knobs, precision control mechanism, undeniably the easiest of all tape recorders to operate. The latest Ekotape models have newly modified, extremely durable cases in an attractive color scheme; also provision for use of our new remounted four-inch and continuous tape magazine (both available as accessories). With Ekotape, you get up to one hour uninterrupted recording—a total of two hours on a 1200-foot reel.

An honored name in the electrical, mechanical and electronic fields, Webster Electric has developed many products for military and civilian use... is constantly searching for ways to make Ekotape—and the products mentioned at the right—still even greater accuracy and utility. The name Webster Electric on any product means quality... dependability... superior performance.



Mail coupon for new Ekotape booklet, "Forever Yours" when Ekotape Co., Radio, Wm., Inc., Franklin 105

**WEBSTER ELECTRIC**  
RACINE • WISCONSIN  
Where Quality is a Responsibility and Fair Dealing an Obligation  
4, NOVEMBER 24, 1952

5 Webster Electric, 1952.

Make your own stereo tapes—play them back on a Webcor Stereo Hi-Fi Tape Recorder!

The Webcor Regent Coronet 2007 Hi-Fi Combined Stereo Tape Recorder will receive and play back stereo and mono recordings. Stack and track stereo playback—dual-channel 16 wall playback—two directional exclusive-type microphones. 3-piece external speaker system for even finer stereo reproduction. Webster Tape Recorder, from \$199.95.

**WEBCOR**—World's Best-selling Tape Recorder



7 Webcor, 1959.